

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24500588

研究課題名(和文) 吃音児者の個別の支援計画の作成と指導及び支援法の構築・展開

研究課題名(英文) Composition of Individual Support Plan for Children or People Who Stutter and Construction/Development of the Guidance and Support Method

研究代表者

見上 昌睦 (KENJO, Masamutsu)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30279591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)： 吃音児者の実態やニーズに即した指導及び支援法について検討するために、事例研究と調査研究を行った。

事例研究では、吃音の進展した学齢児と幼児の他、合併症(構音障害、知的障害、読みや語想起の問題)のある事例、日本語習得中の中国人留学生を対象とした。直接的言語(発話)指導を核とし、カウンセリング的対応、環境調整による指導に加え、合併症に対応した指導を行った。その結果、対象者の吃音は軽快、行動・心理面も好転し、指導の効果が示唆された。

調査研究として、吃音児の吃音に起因するストレスコーピング、セルフヘルプグループとの連携による吃音児支援のあり方、吃音の軽減を考慮した自己調整法等について検討を行った。

研究成果の概要(英文)： In order to examine the guidance and support method that suits the actual situation and needs for people or children who stutter, we conducted case studies and survey research.

For the case study, we subjected the cases where school age children and infants who developed stutter as well as other complications (such as articulation disorder and problem of reading) and Chinese students who are learning Japanese language. It was based on the direct speech treatment as the core and had counseling approach and modification of environment as well as guidance that corresponds to the complication. As a result, subjects' stuttering and their behavioral and psychological aspect were improved so it suggested the effectiveness of the treatment.

For the survey research, we examined the method of support for children who stutter, in which coping with stress originating from stuttering and self-help group were in cooperation, and self-coping method that consider the modification of stuttering.

研究分野：言語障害児教育

キーワード：吃音 指導 支援 吃音重症度 通級による指導 ストレスコーピング セルフヘルプグループ 連携

1. 研究開始当初の背景

吃音(発達性吃音)は発話の流暢性の障害であり、発達期の主要な言語障害の1つである。吃音の学齢期以降の有症率は1%(思春期以降0.8%)程度と高い(American Psychiatric Association, 2000)。幼児期に発症した吃音が治癒せず、就学を迎えた場合、程度の差こそあれ、ほぼ生涯にわたって吃音を有して生きていくという可能性は高い。それゆえ、吃音の問題は個別の支援計画に基づき、ライフステージを通して考えていく必要がある。また、吃音については病因が未解明であり、病態に対応した支援法が案出されていない。そのため、吃音児者の個別の支援計画の作成と、それに基づく効果的な言語聴覚療法及び支援法の構築は緊要な課題である。吃音児に対する個別の支援計画については、松村(2005)が想定事例で試案を提示しているが、実在の事例を通しての研究報告は見あたらなかった。さらに、高校～高等教育機関～就職の時期における指導及び支援のあり方については手がつけられていなかった。

2. 研究の目的

筆者らは、ライフステージを通しての吃音児者の実態に即した支援法について、事例研究と調査研究から検討を行ってきた。吃音の進展した幼小児に対する指導及び支援法に関する事例研究(見上,2002,2007他)では、環境調整と遊戯療法に加え、流暢性を促すための言語指導を実施し、改善例を集積してきた。調査研究では、成人吃音者を対象に、学校教育期(小学校～高校)における通常の学級担任の教師に望む配慮・支援(見上・森永,2006)及び高等教育機関(大学、短期大学)に望む吃音のある学生に対する配慮・支援(見上・横井,2007)について検討を行った。さらに、女性吃音者のライフステージからみた吃音に対する意識(見上・福田,2005)について検討を行った。しかし、これらの調査研究は、主に成人吃音者を対象としたものであり、いま現在学校教育期にある吃音児者及び通常の学級・学校の教職員を対象に吃音支援に関する意識及び実態調査を行う必要がある。

本研究では、吃音支援に関する上記研究の成果を踏まえ、吃音のある幼児、学齢児、学生等を対象とし、実態やニーズに即した指導及び支援法を構築し、個別の支援計画及び個別の指導計画作成に生かしたいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 事例研究として、吃音児者の実態やニーズを踏まえた上で、指導及び支援を行い、その効果について検討を行った。

(2) 調査研究として、吃音者のセルフヘルプグループとの連携による吃音児支援のあり方、吃音者の吃音の軽減を考慮した自己調整のあり方、吃音児の吃音に起因するストレスコーピング、吃音者の吃音の公表、吃音児の

きょうだいの意識、に関する検討を行った。

4. 研究成果

吃音児の実態やニーズに即した指導及び支援法について検討するために、事例研究と調査研究を行った。

(1) 事例研究

対象者

1) 吃音の進展した学齢児：発吃2～4歳代、初診(指導開始)時に8～11歳の6例(吃音重症度評定尺度で重症度5～7、4例に間接法による受療経験有り)。うち1例は時々「学校に行きたくない」と言っていた。

2) 吃音の進展した幼児：発吃2～4歳、初診(指導開始)時年齢2歳4ヵ月～5歳7ヵ月の10例(吃音重症度評定尺度で重症度3～7)。

3) 吃音が進展し構音障害を伴う幼児：発吃2歳10ヵ月の男児1例、初診(指導開始)時年齢5歳3ヵ月。構音の誤り有(k t、g d、s ɔ、ɔ s、ts tɔ、dz dz)。初診時吃音重症度6。

4) 吃音の進展したダウン症児：初診(指導開始)時年齢9歳10ヵ月(知的障害特別支援学級在籍)のダウン症児。構音の誤り有(s ɔ、z z、ts tɔ、dz dz)。会話明瞭度3、初診時吃音重症度5

5) 軽度知的障害を伴う吃音児：吃音を主訴とし、初診時に小学校2年と5年の2例。言語障害通級指導教室において指導が行われた。WISC-IIIによるFIQは前者63、後53。前者は通常の学級(他校)、後者は知的障害特別支援学級(他校)に在籍。

6) 読みの問題のある吃音児：吃音を主訴とし、初診時に7～8歳代の3例。言語障害通級指導教室において指導が行われた。音読時に吃音症状と共に誤読が多くみられた。WISC-IIIによるFIQは85～109、IQや群指数間に3例共に有意差がみられたが、LDや発達性読み書き障害の診断基準は満たさなかった。

7) 語想起の問題のある吃音児：吃音を主訴とし、初診時に小学校2年と5年の2例。言語障害通級指導教室において指導が行われた。音読時に吃音症状と共に誤読が多くみられた。WISC-IIIによるFIQは各80、79、吃音重症度は各4、3。

8) 日本語習得中の吃音のある中国人留学生：日本に留学中の母語が中国語で日本語を習得中の吃音のある20歳代の中国人留学生2例。中国語よりも日本語で吃音高生起。

指導方法

- 1) 直接的言語（発話）指導：
柔らかな起声・声でゆっくりと母音部を引き伸ばし気味に発声発話（幼児についてはカメの玩具を動かしながら実施、学齢以降の吃音児者では音読を含む）
- 2) 自由会話（カウンセリング的対応を含む）
- 3) 児童中心遊戯療法
- 4) 親面接（環境調整）〔3〕に並行して実施）

- ・幼児については、インリアル法のリフレティングでも対応した。
- ・事例5)の読みの問題に対して、音読では主に文節ごとに意味のまとまりを意識させるよう指導（小学校2年児）、読めない漢字に振り仮名をつけ、指でなぞりながら音読指導（小学校5年児）した。
- ・事例6)の読みの問題に対して、音読では主に文節ごとに意味のまとまりを意識させるよう指導を行った。
- ・事例7)の語想起の問題に対して、言語発達、聴覚的把持力、他者感情の理解、対応策の検討等を考慮した指導を行った。
- ・事例8)の留学生には日本語と中国語の両言語で指導を行った。

経過

指導開始（事例の多くは月1回程度の頻度で指導）後、全例で吃音症状は軽快〔事例1)の吃音重症度は0~4に軽快、事例2)のうち6例は治癒〕、事例1)5)7)8)の行動・心理面は好転した〔事例1)の前記1例は登校をしづらなくなり、コミュニケーション態度は好転〕。

- ・事例3)：吃音の軽快をみて構音指導（口形音声模倣）実施。6歳2ヵ月時に誤り音kの構音改善。8歳1ヵ月時に吃音は消失、指導を終了した。
- ・事例4)：“ゆっくり”を意識した時や音読時には流暢性増加。中学校入学後、語彙の増加と言語表現の多様化、口腔運動能力の向上。会話明瞭度2に改善。構音指導や就職等の面接指導も実施。就労後、吃音が問題となることは少なくなった。
- ・事例6)の誤読は軽減した。
- ・事例7)は指導開始後に自身の応答時に長い間（無言状態）があることに気づいた。不自然な間の頻度と持続時間は減少した。
- ・事例8)は日本語で吃音が顕著に軽快、就職活動中の1例は内定を得た。

考察

吃音の進展した幼児・学齢児・学生に対し、関連した問題に留意し、ニーズを踏まえながら、直接的言語（発話）指導を核とし、多面的に指導・支援していくことの効果が示唆さ

れた。

- (2) 調査研究
吃音者のセルフヘルプグループ（SSHG）との連携による吃音児支援のあり方に関する検討

SSHGと言語障害通級指導教室担当教師、言語聴覚士との連携による吃音児と保護者に対する支援のあり方について検討を行った。指導担当者67名、SSHG会員を中心とする成人吃音者91名への質問紙調査の結果から、SSHGの活動について、主に情報提供の面で吃音児支援に貢献できると思われた。SSHG会員の吃音児支援の意欲の程度については、「ある（46.2%）」、「少しある（30.8%）」で、意欲の高さが示され、会員の多様な背景や経験が支援に生かされると思われた。

吃音者の吃音の軽減を考慮した自己調整のあり方に関する検討

吃音者の吃音の軽減を考慮した自己調整（話し方の工夫や準備等）のあり方について、10歳代~60歳代の120名を対象に質問紙調査により検討を行った。「言いやすいことばを使って話す」「ゆっくり話す」「柔らかく話す」等で特に「話しやすい」傾向にあった。SSHG非会員や若年齢者で「吃音軽減のための工夫・対策」の使用率が低く、特に吃音重度者への情報提供の大切さが示唆された。

吃音のある児童の吃音に起因するストレスコーピングに関する検討

吃音児の吃音に起因するストレスへのコーピングについて、小学校4~6年の吃音児46名（吃音重症度は中度が多数）を対象に調査した。吃音起因のストレスコーピングの平均得点は5年生が最も高く、他学年児に比べコーピング方略を多く用いていた。「行動回避」では男児、「気分転換」では女児のほうが得点の高い項目があった。対象児の吃音の捉え方や自意識に応じて、選択するコーピング方略が異なることがうかがえた。

吃音者の吃音の公表に関する検討

吃音者の吃音の公表について、自己隠蔽尺度を用いて検討を行った。さらに、吃音の公表に伴う心理的変化や、公表する際に聞き手に求める態度について検討した。SSHG会員を中心とする吃音者110名に調査を行った。対象の吃音者の多くは吃音を公表しており、公表している者は自己隠蔽性が低かった。吃音の公表後に心理面が好転した者は多く、指導・支援に積極的に生かしていくことも求められた。

吃音児のきょうだいの意識に関する検討

吃音児のきょうだいの意識について質問紙調査を通して試行的に検討した。同胞の吃音への意識等について8名（小学校2年~中学校3年）から回答を得た。同胞に吃音があ

ることを生かしていこうという回答(「人の話を熱心に聞くようにしたい」「障害のある人の力になりたい」)もみられた。

(3) まとめ

吃音の進展した幼児・学齢児・学生(留学生)に対し、関連した問題に留意し、ニーズを踏まえながら、直接的言語(発話)指導を核とし、多面的に指導・支援していくことは有効である。

吃音児者の指導・支援に際しては、セルフヘルプグループを始め、関係機関との連携に留意することは大切である。

吃音減を考慮した自己調整(話し方の工夫や準備等)のあり方について考慮することは有意義である。

吃音児者の心理面や吃音の捉え方の変容に向けて、吃音に起因するストレスコーピングや吃音の公表について考慮することは有意義である。

吃音児のきょうだいの支援について考慮することは大切である。

上記について、吃音児者の個別の支援計画及び個別の指導計画の作成に際し考慮していくことが望まれる。

引用文献

American Psychiatric Association, Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders DSM-IV-TR (Text Revision), American Psychiatric Association, pp.67-69, 2000, 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳), DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 80-82, 2002

松村勸由、言語に障害のある児童生徒の事例、香川邦生(編)、個別の教育支援計画の作成と実践 特別なニーズ・気になる子どもの支援のために、教育出版、2005、154-162。

見上昌睦、吃音の進展した小児に対する言語指導の試み、聴能言語学研究、第19巻、第1号、18-26、2002

見上昌睦、吃音の進展した幼児に対する直接的言語指導に焦点を当てた治療、音声言語医学、第48巻、第1号、1-8、2007

見上昌睦、森永和代、吃音者の学校教育期における吃音の変動と通常の学級の教師に対する配慮・支援の要望、聴覚言語障害、第34巻、第3号、61-81、2006

見上昌睦、横井保紀、高等教育機関における吃音のある学生に対する配慮・支援の要望、聴覚言語障害、第36巻、第3号、113-130、2007

見上昌睦、福田真梨、女性吃音者のライ

フステージからみた吃音に対する意識、聴覚言語障害、第34巻、第2号、47-57、2005
5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

見上昌睦、吃音の進展した学齢児に対する直接的言語指導に焦点を当てた指導、音声研究、査読有、第17巻、第2号、2013、45-57

渡邊正基、見上昌睦、読みの問題のある吃音児に対する音読指導、聴覚言語障害、査読有、第41巻、第1号、45-53、2012

〔学会発表〕(計12件)

張亦葦、見上昌睦、中村貴志、吃音のある中国人留学生に対する日本語及び中国語の発話指導、第61回日本音声言語医学会総会・学術講演会、2016年11月4日、パシフィコ横浜、横浜市(日本)

見上昌睦、環境調整法に直接法を組み合わせさせた指導、日本吃音・流暢性障害学会第4回大会、2016年9月2日、国立障害者リハビリテーションセンター学院、所沢市(日本)

Masaki Watanabe, Masamutsu Kenjo, Tokio Watanabe, Naoshi Maeera, Guidance to children who stutter accompanied by unnatural pauses, 2016年8月25日, Citywest Hotel Conference & Event Centre, Dublin, Ireland

Masamutsu Kenjo, Kaori Mizuno, Takashi Nakamura, Study on stutters' self-coping for modifying stuttering, 2016年8月23日, Citywest Hotel Conference & Event Centre, Dublin, Ireland

見上昌睦、西野綾希子、中村真凡、吃音のある子どものきょうだいの意識に関する検討、日本吃音・流暢性障害学会第3回大会、2015年8月30日、大阪保健医療大学、大阪市(日本)

Masamutsu Kenjo, Yuichi Miyashita, Takashi Nakamura, A study on stress coping of children who stutter, 2015年7月7日, Catholic University in Lisbon, Lisbon, Portugal

Masaki Watanabe, Masamutsu Kenjo, Guidance to a child who stutters accompanied by unnatural pauses, accompanied by unnatural pauses, 2015年7月6日, Catholic University in Lisbon, Portugal

岡亜由美、見上昌睦、中村貴志、吃音者の吃音の公表に関する検討 自己隠蔽尺度を用いて、日本特殊教育学会第52回大会、

2014年9月22日、高知大学朝倉キャンパス、高知市（日本）

Masaki Watanabe, Masamutsu Kenjo, Guidance to children who stutter accompanied by intellectual disabilities in Japanese school education, 10th Oxford Dysfluency Conference, 2014年7月19日, St Catherine's Colliege, University of Oxford, Oxford, UK

Masamutsu Kenjo, Wang Xu, Takashi Nakamura, An examination regarding methods of support for children who stutter in cooperation with self-help groups in Japan, 2014年7月19日, St Catherine's Colliege, University of Oxford, Oxford, UK

Masamutsu Kenjo, Multidimensional of school-age Japanese children who developed stuttering focusing on direct speech treatment, 29th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics, 2013年8月27日, Lingotto Congress Centre, Torino, Italy

見上昌睦、吃音の進展したダウン症児に対する指導、第57回日本音声言語医学会総会・学術講演会、2012年10月19日、大阪国際交流センター、大阪市（日本）

〔図書〕(計2件)

小林宏明、川合紀宗、見上昌睦、他15名、学苑社、特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援、2013、246

加藤正子、竹下圭子、大伴潔、見上昌睦、他4名、学苑社、特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と支援、2012、250

〔その他〕

国際会議プロシーディングス

Masaki Watanabe, Masamutsu Kenjo, Guidance to a child who stutters accompanied by unnatural pauses, 2015 International Fluency Congress Proceedings, 査読有, XXV, 1-2, 2016

Masaki Watanabe, Masamutsu Kenjo, Guidance to children who stutter accompanied by intellectual disabilities in Japanese school children, Procedia-Social and Behavioral Sciences, 査読有, 193, 2015, 274-277

Masamutsu Kenjo, Wang Xu, Takashi Nakamura, An examination regarding methods of support for children who

stutter in cooperation with self-help groups in Japan, Procedia-Social and Behavioral Sciences, 査読有, 193, 2015, 175-182

6. 研究組織

(1) 研究代表者

見上 昌睦 (KENJO, Masamutsu)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30279591